

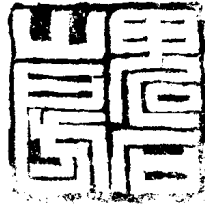
虎と名戸から

本多秋五

遠望近思

鬼石谷戸から

筑摩書房



遠望近思	鬼石谷戸から
著者	本多秋五
一九七〇年九月一五月初版第一刷	
発行者	竹之内静雄
印刷所	大日本法令印刷株式会社
製本	鈴木製本株式会社
美術製版	株式会社便利堂
装帧	栃折久美子
発行所	株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八郵便番号一〇一—一九一 電話(二九二)七六五一 振替口座東京四二二三	
定価	千五百円

(分類) 0095 (製品) 81019 (出版社) 4604

遠望近思

鬼石谷戸から

目次

I

殷周青銅器の魅惑……………九
白鶴美術館を訪ねる……………一九
住友博古館を見る……………二四
『東洋美術』の『銅器』を見て……………三四
「虎頭兕觥」と「乳虎卣」……………三九
「乳虎卣」の印象……………四三
「スキタイとシルクロード展」を見る……………五七
「牛鼎」と「鹿鼎」……………六九
「牛鼎」と「鹿鼎」(続)……………七六

II

有島武郎のこと……………九三

神なき自我……………一〇三

広津さんの死……………一三三

『小僧の神様』など……………一三三

宮本百合子の駄作と名作……………一三三

宮本百合子の日記と手紙……………一四三

Ⅲ

ソツロン奇譚……………一七〇

チェホフの『三人姉妹』……………一七〇

水戸の天狗党……………一七六

石田英一郎氏のこと……………一八八

耕治人氏の『一条の光』……………一九九

『日本の気象』など……………二〇八

『サランボー』所感……………二一九

「歴史其儘」と「歴史離れ」……………	三九
『黒馬を見たり』所見……………	三六

IV

『戦争と平和』の翻訳……………	二四九
『戦争と平和』の翻訳再説……………	二五九
『戦争と平和』の歴史哲学……………	二六九
『戦争と平和』の歴史哲学再説……………	二八三

V

「人類学的等価」について……………	三〇一
-------------------	-----

あとがき……………	三五
-----------	----

遠望近思

鬼石谷戸から

I

殷周青銅器の魅惑

近年、われながら不思議な心理だが、殷周の銅器に心ひかれ、あれらの存在が気がかりになっている。手に入れることなど夢にも思っておよばず、実物にお目にかかることすら滅多にないものが、どうしてそんなに気になるのか、自分にもよくわからない。

私がかんだん現代嫌いになってきたこと、雨にも風にも腐らぬ堅固なものを好む気持が昔から私にあること、それらとどこかで関係があるらしい。そんな見当がつくだけである。

殷周の銅器といっても、煎じつめれば殷である。周は、殷のつくり出したものを継承したのであって、周人を圧倒し拝跪させるほどのものをつくり出した元祖は殷だからである。神にひとしい青銅の容器類は、殷の時代に一挙に完成の極に達してしまった。

殷の宮殿や宗廟は茅ぶきの建築であつたらしい。都城の内部に住む多くの人々は堅穴を住居とし、農耕には主として石器がもちいられていたという。そんな時代に、どうしてこれほどのものがつくり出されたのだろうか？

貴族と奴隸、青銅器鑄造の技術とその他一般の技術——その間にある天と地ほどの懸隔不平均が凝ってあれらの恐ろしい製作物になったのだろうか？ ささやかな草に巨大な葇がみのる。枝葉が繁ると実が貧弱になる植物の例は多い。そんな想像さえしたくなる。

謎があるから心をひかれる。それは確かだ。謎のないものはつまらない。しかし、謎が心をひくのではない。謎はあっても、さっぱり心をひかれないものもある。日本の銅鐸などがそれである。謎は、これほどのものを一体いかなる人間心理が生み出したのだろう、と思いを馳せるときに生れる。これほど敵めしく無愛想なものが、なぜ忘れられぬ牽引力をもつのだろうか、と自省するときに生れる。直接的なものは、あれらの古怪な器物を目前にしたときの感動である。

殷の青銅容器は、宗廟の祭器であったといわれる。この宗廟とか、宗廟を宗廟たらしめる、祖神とかいうものが曲者で、われわれは容易にそれをリアイズできないのだが、それにしても高が器物である。それも飲食の器具である。そんなものが、どうしてそれほど高い權威をもち、夥しい富と頭腦が傾注されるにいたったのか？

器物崇拜は、実はわれわれにとっても無縁ではない。われわれは鏡や剣を御神体とあがめてきた。鏡や剣や玉はまた皇位のしるしとされ、南北朝時代などには、皇位よりもそのしるしである器物の方が重要であるかの觀をさえ呈し、奪ったり奪い還したりするために生死の鬭争が演ぜられた。われわれには、器物崇拜を怪しむ資格がなさそうでもある。

しかし、われわれの場合、それらの器物が尊いのは、その由緒によってであり、過去の何かの記念物として神聖なのである。ところが、殷の青銅器類は——この場合、周もおなじといえるのだが——現役において尊いのであり、製作のはじめから神聖なものとしてつくられたのである。おなじく器物崇拜といっても、そこに性質のちがいがあのように思われる。

あれらの青銅器の傑作には、凝集され、圧縮された恐ろしい力がある。中国の厚い壁や脂っこい食物に通じる分厚さと、宋の磁器にあらわれる敵しさとが結合している。どんな重量をも確ともちこたえる磐石の安定感と、天にむかってそそり立つ力とが結合している。抱きかかえる力と、腹いっぱい詰め込む能力との結合がある。そこに醜いほどの美がある。あれらの傑作は、そのものとして完成の極致に達している。

これらの青銅器について、関野雄氏はつぎのように書いている。

「いったい殷と西周の美術は、総じて象徴化と様式化に富み、個性的な美しさと軽快さに欠けている。そこには、一種の重苦しい空気がただよっているだけで、歌もなければ詩もない。銅器の示す異様な形態と繁雑な文様は、私たちが怪奇な幻想の世界へと導く。……考えてみると、これらの銅器は宗廟の祭器として、宗教的な仮面をかぶってはいるが、じつは支配者の超人的な権力を象徴し、無限の財力を顕現するものでなければならなかったはずである。つまりそこには、自由な表現も素朴な描写も必要でなかったばかりか、むしろ、それらを拒否する力が逆に働いてい

なければならぬ。いかえれば、純芸術的な意欲が特定の目的によってゆがめられ、変則的な傾向だけが支配していたと認めざるをえないのである。」(講談社版『世界美術大系』第八卷『中国美術』その一『先史と殷周の美術』)

この芸術観は、おなじ文章のなかで、戦国時代の美術に関野氏がふれた個所にあられる芸術観と、よく相応している。すなわち、氏は、群雄割拠の戦国時代に入ってから中国美術は、一方で社会情勢に大きな変化が生じたため、他方ではスキタイ系の北方美術にふれたことによって、ダイナミックで写実的なものになり、また、もっぱら王者の權威を象徴する性質から解放されたと指摘しつつ、かくて「漢民族がみずからのうちに秘めていた芸術意欲は、ここに多年の重圧から解放され、ふたたび表現の自由を獲得するにいたったのであろう。」と書いているのである。

私は関野氏の著作をそなたに多く読んでいたわけではないが、読んだかぎりでは大変信頼できる人と思っっている。信頼できる人と思うばかりでなく、その眼くばりや心づかいからいって、同感される点の多い、親近感のもてる人と、ひそかに思っている。しかし、殷周の銅器は「純芸術的意欲」がゆがめられたもの、戦国時代の美術は「重圧から解放され、……表現の自由を獲得」したものとするのは、あまりにギリシャ的な見方ではあるまいか。

上掲の文章より約一五年前に書かれた『中国芸術の側面』をみると、関野氏は、こんな風に書いている。「芸術意欲の発動は、自由の精神に由来する。かの希臘彫刻に見られる洗煉された

美しさは、各個人が自由であるという精神の中から生れた。これに対して中国芸術における繁蕪性は、ただ一人が自由である、若しくは少数の者が自由であるという封建的社會の所産であり、中国的な規範の世界の産物である。」(『中国考古学研究』)——氏の造形美術に対する芸術観は、やはりギリシャ彫刻に養われたものであるらしい。

さきに引用した文章のなかで、氏が、製作された当時の股周銅器は「磨きたての真鍮の洗面器」のようにピカピカ金色に光ったものであり、「美しいというより、むしろグロテスクなもの」であったにちがいない、と書いているのも、そう思ってみれば、股周銅器が氏の芸術観にとって異質のものであり、氏の肌に合わせて語っているように思える。

ギリシャ彫刻は、たしかに自由で、人間的で、誇り高く、他の異質の芸術をさまよってギリシャに還ると、素晴らしい、と何度でも感歎を新たにさせられる。あれらはまさしく人類がつくり出した芸術の嫡出子に相違ない。私の造形美術に対する感覚にしても、知らず識らずにギリシャ彫刻によって基本を養われているだろうと思う。しかし、だからといって、股周銅器の傑作が、それとして行きつくところまで行きつくし、完成の極致に達したものであることを否定できない。私は芸術上の多元論者だ。

ギリシャ彫刻を見る見方で、エジプト彫刻を評価することはできない。股周銅器にしても同様である。エジプト彫刻にしても、股周銅器にしても、一旦ある型ができあがると、それが習癖と

化して何世紀もの間くり返され、墮落し、衰退する。型のくり返しが墮落しなかったら、その方が不思議である。しかし、傑作には、創造にともなう緊張があるとともに、その芸術が行きつくべきところまで行きつくした極致が具現されている。それは、そのものとして完成されたものであり、他のどこにも求められないものであり、当然に固有の見方を要求する。

私は戦国時代の美術についてまるで無知だが、殷人がはじめて地上にあれらの青銅器をつくり出したときの巨大な創造的エネルギーに匹敵するものが、果して戦国美術にあったのだろうか？ にわかには信じがたい気がする。「自由」という言葉の内容は、いろいろに考えられるが、あれほど巨大な創造力がはたらいたところに人間の「自由」がなかったらどうか？ そうだとすれば、その「自由」はちと窮屈な気がする。

ギリシャの神々の像は人間にかたどってつくられ、エジプトの神々の像は動物の頭をもつ人間という怪物的表現をとった。中国では飲食の器物が神であった。「……未開社会からギリシャにいたる神像の発展の系列のなかで、中国の古代青銅器は、エジプトの段階の少しそれた一歩手前」（貝塚茂樹『神々の誕生』）というのも、呪術から宗教への宗教発達史上の話としてならなく、造形美術上の問題としては、一歩手前とか、もうひと息とかいったものではないと思う。殷周の青銅器は、これはこういう独特のもの、として評価すべきだと思う。

殷周銅器について書かれたものを読むと、饗饗ちやうちやうもん文などについての研究が詳しい割合に、器形そ